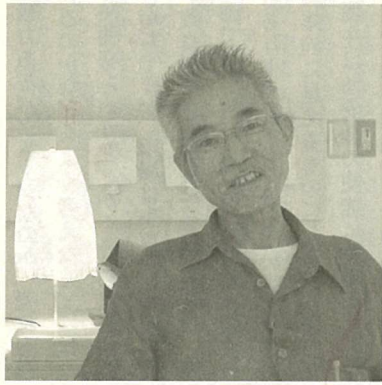


和紙 だより

越前和紙への提言



■加藤俊男

(有)イメージラボテキスト代表取締役。高知県生まれ。東京造形大学インダストリアルデザイン学科卒業。東京にて電子機器、輸入家電などのデザインを手掛けた後、1982年、故郷高知県の町にUターンし、イメージラボテキスト設立。立体抄造法による土佐和紙の照明器具-CARTAシリーズを開発。確かなデザイン力と商品企画、ID的経営手法で、和紙産地では珍しい成功例となる。Gマーク他、数々のデザイン賞受賞。

<http://www.carta.co.jp/>

■加藤俊男さん(インダストリアルデザイナー)
「ゴールをひとつひとつ見えるものにする」

●売れる商品の経験

私が卒業した当初はこの分野の花形である家電が、クルマか、住宅メーカーに就職したかったので。就職難の時代でしたが、GTD(ゼネラル・エレクトリック)の極東オフィスに雇ってもらいました。そこでOEMのアメリカ市場向け小物家電のデザインをしました。当時の副社長はアメリカ市場をよく分かったデザイナー出身の方で、忙しい時期になると世界中からデザイナーを集めて短期間に「デザインさせるのです。アメリカ流に週給制の会社ですから、できるいい人にはキャッシュで高額のデザイン料をパーンと渡すのです。びつくりしましたね。当時は、クリスマス商戦に向けたラスベガスやニューヨークで開催されるフェアに出品するラジカセやクルマのオーディオなどをデザインしていました。アメリカ向け商品は、まず量産が可能であること、どこにでもある方法で製造できること、そして商品にどこかチャーミングで売れそうな要素がないといけません。ラジカセの金属の取手部分にカラフルなゴムを巻いたものなどを私がデザインすると、副社長に喜ばれたのです。

●「距離感」を原点に

七年ほど、東京でデザインに明け暮れる大変忙しい生活を送ったのですが、とうとう病気になるってしまい、故郷へ戻らなくてはいけなくなりました。病気が全快するまでほぼ十年を費やしたわけですが、その間たじつと病気とつき合っていたわけではなく、実は和紙を立体に作る研究や試作

を行っていたのです。和紙は、学生時代に課題で選び、二夏、職人さんに弟子入りして製作技術を習得し作品に仕上げたこともあり、小さい頃から身近な素材であったのも事実です。又、工業デザイナーとして、地元高知の素材で面白いことができたらいいなあと漠然と考えていました。ただ、紙というと、工業的な部分と、手漉きに代表されるクラフト的な部分とあり、どちらに行くかはだいぶ迷いました。ここは手漉きの産地だけれど、クラフトや作家には何か距離感があつたのです。しかし、待てよ！東京のデザイナーは紙の製造現場を見たこともない。紙のことを某か肌感覚として知っている私にしかできない和紙のデザインがあるのではないかと思い始めたのです。つまり、手漉きをいかに工業デザインの領域でがんばれるか「距離感」を原点に置いて考えてみよう。

●設計事務所向けの施設照明器具

方向性が見えたら、こんなデザインが可能になるには、こういう紙がでさなくてはいけないと見えてきて、数年かけて



繊細な花びらを漉き込んだ京都・迎賓館採用のS-Curveシリーズ



仁淀川沿いのショールーム兼オフィス

開発したのが立体抄造法でした。特許も取りました。意匠登録もCARTAの商標登録も取りました。CARTAは最初から、設計事務所向けのいい照明器具を目指していたので、すぐに山田照明に営業に行きました。併行して、設計事務所所へDNを出して知ってもらおう。インテリア関係のトレードショーに出品するなどです。その後インターネットも普及し始めましたので、地方にいても直接販売できるかなあと思っていたのですが、これは甘かった。コンピュータの画像では、和紙の照明の実際の美しさや良さが表現できないのです。やはりショップで実物を見てもらうには、大手の力を借りなければなりません。現在、照明器具会社(遠藤照明)のOEMとして納入業者契約をしている他、建築家に指名して頂けるようカタログに力を入れています。CARTAの他にも、「おやすみカルタ」というシリーズがあり、これは雑貨分野に入つていこうとした時に開発したものです。図柄をコンピュータに取り入れレーザーでカットしたものを漉き込みますので、子供の手描きのイラストも絵柄にすることができ、デザインバラエティは無限です。結婚式やお祝い事の特注需要に利用して頂いています。

●商品計画ではなく、商品「化」計画でないとダメ
私も商品の開発には補助金を使いました。商品計画は概して試作作つて内輪のお披露目で終わる。しかし、実はその試作が本場にニーズに

ているか、魅力あるパッケージなのか、売れる営業をしているのかなどをよく考えなくてはなりません。商品開発というところから計画の整合性に眼が行きがちですが、市場は生き物。現実に対応して変更や改良のできる柔軟な姿勢を伴う、商品「化」計画でないといけないのです。時にはうれしい誤算もあります。ひとつひとつのステップのゴールを具体的に見えるものにしていく能力が大切です。現在は助成金の使途に営業も入れていいことになっていると思いますので、ものづくりの後を大事になさってください。

イメーラボの紙漉き工房は企業秘密とのことで、今回見せては頂けなかったが、実はこの成功の最も重要な要素のひとつが、外注しなくともスタッフだけで紙が漉けるということだと思ふ。加藤さんも、パートナの女性デザイナー石元さん、紙漉き職人の横島さん、三人寄れば漉けない紙はないという。「これからの手漉き和紙産業はワイナリーみたいなものではないか」と、加藤さんは言う。含蓄のある言葉だ。



「おやすみカルタ」シリーズ ほたる

特注柄もOKの常夜灯「おやすみカルタ」シリーズ

■土佐和紙の場合 「土佐楮安定供給が課題」



事務局長の
上田(あきた)剛司さん

土佐和紙の始まりは、九三〇年紀貫之が土佐に着任した時に官用紙を漉かせたことに始まるという説もあるが、既にそれ以前から漉かれていたらしい。江戸時代、土佐七色紙が創製され山内一豊に献上したことから、幕府や藩によって独占的に買い上げられる御用紙となる。明治初期に、御用紙漉き家柄の吉井源太が、鎌倉・室町時代に美濃国(現在の岐阜県)で漉かれていた典具帖という技法を高知県に導入し、世界一薄く、強靱な「土佐典具帖紙」として定評を得る。以降この紙は、他の紙の数倍もする高級輸出紙として高知県に外貨をもたらす。県を紙業王国に導く。明治中期からは全国一の生産量を誇り、昭和十六年には二十%を生産したと言われている。主な用途は、タイプライター用紙、ガリ版用原紙、障子紙などで産業用紙としての需要が主であった。一九〇八年、紙輸送のために伊野・高知堀詰・棧橋間に電車が敷かれる。この路面電車は今でも地元の人の足として利用され、往時の繁栄ぶりをうかがい知ることが出来る。戦後は、手漉きの分野は急速に洋紙や機械漉きに取って代わられ、産業用手漉き和紙の需要は落ち込む。襖や障子等の住宅需要も少なくなつた現在、いの町を中心とする手漉き和紙の用途は、書道・版画・絵画等の芸術関係、ちぎり絵・ペーパーフラワー・押し花等の手工芸関係、表具・裏打ち等の文化財修復関係に変化し、「ある意味で手漉き本来の姿に収束されたのでは」とは高知県手漉き和紙協同組合事務局長、上田剛司さんの弁。和紙協

同組合は、高知県立紙産業技術センター(平成七年新社屋完成)の一角にある。上田さんに、土佐和紙の昨今の動きと課題を伺う。

●土佐楮の危機

土佐和紙の特徴は、原料生産、用具製作、職人技術が三位一体、一ヶ所に揃っていることにある。中でも山が多く高温多雨な高知県は楮の栽培に適しており、国産楮の半分は高知県産。しかし近年栽培農家の高齢化と林野行政の矛盾など構造的な問題を抱え、土佐楮の栽培が危機を迎えている。紙の用途や機能性に合わせて、原料を用途によつて使いこなす柔軟性が必要になつてきた。例えば輸入のタイ楮は油分が多いが、それで構わない用途も少なくない。最近では四季が日本とちょうど正反対の南米パラグアイ産の楮も入つてくると言う。こちらの方は、日本からの適切な指導もあつて品質はよいという。どうしても土佐楮でなくてはならないのが、文化財修復用版画・美術紙、書画用など。組合では、今年中に「土佐楮保存会」を立ち上げたいと話す。「土佐楮は那須楮と並んで、全国の需要にも応えているわけですが、このままで行くとつと生産が減ってきます。高知県が残す努力をいち早くやらなければいけないという使命感があります。行政の支援を得て、栽培農家へ補助して頂き、安定した価



平成7年完成の高知県紙産業技術センター建物

格で漉き場さんに提供することができればいいのですが、原料が安定供給できないと、この歴史ある技術も途絶えかねない。それでもダメな場合は、外国で質のよい日本の楮を作ってもらえない。」と上田さんは危機意識を隠さない。

●用具製作

道具作りも和紙産地を外回りから支える重要な職種だ。簀篋みや桁つくりの職人は主要産地に分散していたが、紙漉きの減少に伴い道具作りを廃業する産地が相次いだ。そんな状況を鑑み、高知県では、昭和五十年(一九七五)に土佐手漉和紙用具製作技術保存会が記録作成等の措置を講ずべき無形文化財に選択され、翌年には、全国手漉和紙用具製作技術保存会が文化財保存技術保持団体に認定された。現在この保存会の事務局も、組合にある。全国の用具作りの職人などで構成されるこの保存会では、国の助成を受けて全国の道具製作者の後継者育成事業を行っている。



第22回紙とあそぼう作品展---いの町の博物館にて展示

●職人技術

人間国宝・濱田幸雄さんが漉く楮原料の土佐典具帖紙を代表格に、雁皮原料の薄様雁皮紙、三極原料による図引紙等、薄紙を漉く技術には卓越したものがあつた。また、紙の種類豊富さは飛び抜けているという。現在、紙漉き工房は三十軒弱。二軒一軒が特徴のある違う紙を漉く。お隣の高知県立紙産業技術センターは、基礎・応用・開発研究、先端技術の導入、人材育成や技術

指導などを行っており、実験室や設備があるので、自分の漉き場で作れない時はこの設備を借りに来る人もいます。職員の中には紙分析の大家もいて、文化財修復の紙復元などに、永年培われた知識を発揮している。手漉き和紙においても、この様な組織とうまい連携が取れるのは有り難い。



土佐和紙の人間国宝、
浜田幸雄さん

●トリエンナーレ

いの町には他に町営の「紙の博物館」、「土佐和紙工芸村」がある。工芸村は平成七年完成時から、後継者育成の研修制度を行い、今までに三十人ほどが受講、十人が独立した。

しかし何と言っても土佐和紙の名を世界に広めたのは、二十年余り続けてきた「高知国際版画トリエンナーレ展」の開催であり、組合が事務局を担ってきた。旧ユーゴのリュブリアナ国際版画ビエンナーレ、ポーランドのクラコフ国際版画ビエンナーレと並んで世界で三本の指に数えられる版画展と位置づけられている。平均七ヶ国、九百人から応募があり、版画家の登竜門ばかりでなくプロの作家が応募する国際展として世界的に高い評価を得ることができた。

上田さんは「使う人間と、作る人間がもっとコミュニケーションを取り、和紙に関係する人たちが仲間意識を持って交流を活発にすることが大切だと思います。組合はそういう機会を作る手助けをします。土佐楮保存会は賛助会員制を取り、シンポジウムに関係者を呼び、会報を年に二〜三回出せるように準備中です。」と語る。

取り組み紹介

■四半世紀を迎える
「和紙パルソンズ」の活動



パルソンズ初代リーダー
山次製紙所の山下善久さん

「和紙パルソンズ」は一九八三年六月、越前和紙を担う若手三人で当初「KAMIグループ」という名称で結成された。折しも地場産業活性化のために、各地でデザイン行政を推し進めようとしている時期だ。福井県工業技術センターでも技術アドヴァイザー制度を設置。この会のデザイナーとおつき合いが始まり、その間趣を変えながら活動は気が付いてみれば、はや四半世紀を迎える。現在リーダーで、創設者の一人でもある山次製紙所の山下善久さんに、これまでの活動を振り返り、今後の活動指針を伺う。

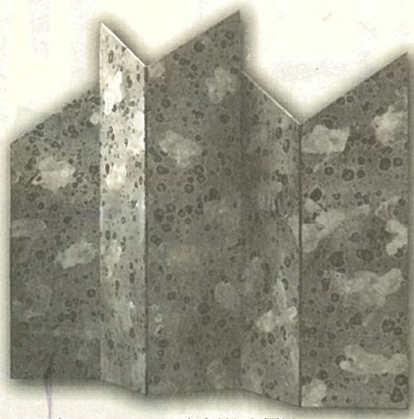
●デザイナーという人種に初めて遭遇

工業デザイナー川崎和男さんに始めてお会いしたのは、確か彼が東京から郷里の福井へ戻ってきた、一〜二年経った頃ではないかと思えます。滝隆一さんと県の工業技術センターにデザインの相談に乗ってくれる所ができたというので、行って見たのです。こちらもデザイナーってどんなことができるのか分からないし、川崎さんの方も和紙といつてもどんな紙ができるのか分からないし、お互い一年くらいはお見合い時期みたいなものではないか。一年後には五十嵐義宣さんを引っ張って福井に日参したのです。川崎さんに宿題もらうと、作っていつては見てもらおうという作業を繰り返して、後には一週間に一回のペースになりました。面白かったし、本当に楽しかった。問屋さんの宿

題よりよっぽど楽しかった。(笑)。発想からして僕らの概念はずれていくし、デザインとは何かを吹き込んでもらった。紙の世界だけでなく、世の中の動きやものづくりの背景にどういう仕掛けがあるのかといったことを教わったような気がします。これを機にデパートに行っても、ものの方が変わりましたね。

●旗揚げ

武生でも、川崎さんの指導で「タケフナイフビレッジ」というグループができ、越前和紙も若手グ



1986年ニューヨークにも出品した屏風

ループを旗揚げしてはということで、青年部の集まりで先生に講演をして頂いて、入会を呼びかけました。山口荘八さん、梅田修二さん、柳瀬晴夫さん、小畑明弘さん、組合の山崎信之さん、内藤裕明さん。総勢合わせて九人に、一番若い東京修行から戻りたての石川浩さんを引き入れ、六月には合わせて十人となりました。滝さんは襖と機械、僕は手漉きの小間紙、五十嵐さんは機械漉き担当。どんな紙でも作れるグループになればいいなあという思いでした。そしてその年（一九八四年）の九月にはもう東京六本木のアクシスで「越前物語」という展覧会を開いたのです。川崎さんとは後にニューヨークで、武生のナイフ、越

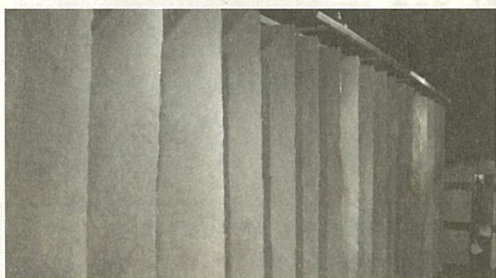
前の和紙と漆器など伝統産業の挑戦を見てもう展覧会「越前若狭物語」でも同行させて頂きました。自分の作ったものを海外に持って行って、そこで評価をいただいたわけですから、僕らとしては充分手応えがありました。

●大いに燃えた

その後、やはり和紙に関心のあった森島紘史さんとお近づきになり、一九八五年にもアクシスで「BYOB」展を開催しました。森島さんは、プロダクトもグラフィックもなさる方で、作りたいもののイメージをしっかりと持ち、製品化するのが上手な方でした。僕たちは、彼が出す宿題！土壁風な紙、大理石風の紙、セメントの打ちっ放しのような紙、自然を感じさせる紙などのお題をいただいて、試作を送っては、これは採用、これはダメなどとやっていたのです。屏風展の時は、三〜四ヶ月くらい五時に仕事終わってから毎晩紙漉きやっていた。よくあれだけ打ち込めたなあと思うくらい、みんな燃えていたのです。十人いれば一人十点考えれば、百点できるぞって言っていたのですよ。屏風展は会場を迷路みたいに屏風で埋め尽くし壮観でした。

●伝える紹介

ここ十数年は、金沢パーパシオンに毎年作品を出品しています。僕たちは、この活動を通して紙の可能性に挑戦し、紙を見てもらいたいという一心でやってきました。ただ、



和紙で微妙な色グラデーションが出せることを示した2006年の作品

2007年の出展作品-和紙と写真の融合展



売ることには余り考えていませんでした。照明器具などの最終製品にして出品するのも、紙を見せるためです。昔の作品の記録などもきちんと残してこなかったし、当時は早すぎて売れなかったものも、今出したら売れそうなものはいくらでもあります。その辺が下手だなあと思っています。うまく僕らの意を組んで紹介してくれる人がいなかったために、もったいないことをしているのです。手前味噌ですが、ひとつひとつの出品には僕らなりに意味付けし、内容は充実していると思うので、もう少し面白いや効果ある広報や宣伝に結びつけなくてはなりませんね。今年の「和紙と写真の融合展」は、越前ならではの大きな和紙と地元の写真家とのコラボレーションで好評でした。

■七人の手漉き和紙職人による「和紙のユメ展」

六月三日〜七月四日、東京都世田谷区の「梅ヶ丘アートセンター」で、越前和紙若手手漉き職人（天田洋子、熊澤和美、清水拓郎、妹尾直子、田中雄士、東野早奈絵、三木尚志）によるアートな展覧会が開催された。

二〇〇七年春に開催された「東京コレクション」で、川島ちなみさんの作品に和紙のトルソが使用され、その作品を手がけるきっかけとなった梅ヶ丘アートセンターの丸谷博男さんの呼びかけで、今回の作品展が企画された。

参加メンバーは越前の和紙工房や工場で働く青年たち。日頃見慣れている家具や日用品を和紙で型どることで、シュールでポップな雰囲気がかもし出された。出展者は口を揃えて、「新しい和紙の可能性を探る習作として、面白かった。また、あらためてベーシックな日頃の仕事に新鮮に取り組んで行きたい。」と語っていた。



「和紙のユメ展」会場風景



東京コレクションでの和紙のトルソ

情報欄

●イベント情報

■継体大王即位1500年関連イベント

時：10月5日(金)〜7日(日)

場所：和紙の里通り、紙祖神 岡太・大瀧神社、文化博物館、卯立の工芸館など

詳細右欄

■素の紙展

時：10月10日(水)〜13日(土)

場所：東京都港区エコプラザ

詳細下欄

■中国・四国・きんぎ工芸品フェア

時：10月19日(金)〜21日(日)

場所：京都西陣会館

墨流し体験、和紙製品即売あり

■東京えちぜん物語

時：10月10日(水)〜13日(土)

場所：東京都港区エコプラザ

墨流し・紙漉き体験、和紙製品即売・展示あり

■伝産全国大会・工芸士大会・ふれあい広場

時：11月7日(水)〜11日(日)

場所：鹿児島アリーナ他

●こしの都1500年祭の和紙関連イベント

越前和紙の里では、継体大王関連イベントとして復元した古代和紙の奉納、伝統芸能のパフォーマンス他、様々な催しが行われます。夜間、大瀧神社までの風情ある町並みには、子供達の夢や希望を託した和紙行灯を配し、幽玄な光で秋のひとときを演出します。

1.奉納祭

古代紙の製作・奉納が行われます。

時：10月6日(土)

場所：味真野神社・粟田部岡太神社

2.こしの都伝統文化交流祭

紙の伝播を巡る韓国と日本の伝統芸能の競演。

時：10月6日(土)18:00-22:00

場所：紙祖神 岡太・大瀧神社。特設ステージ。

3.和ッショイいまだて in 和紙の里

古代紙・古代布製作体験、漉場体験、遊びの広場

時：10月6日(土)〜7日(日)

場所：和紙の里通り

4.県民文化祭参加展示

古代紙・古代布等奉納品の展示

時：10月6日(土)〜29日(月)

場所：卯立の工芸館

編集後記

暑いさなかの高知取材でしたが、産地の雰囲気は昔見た映画のようでした。美しい川と緑濃い山々、漉き場の匂い、高知訛りがとても印象的でした。(よ)

●「素の紙展」2007

時：2007年10月10日(水)〜13日(土)

場所：東京都港区エコプラザ「東京えちぜん物語」会場内

東京都港区虎ノ門3-6-9(日比谷線神谷町駅より徒歩5分)

■ミニセミナー開催 10月12日(金)17:30-19:00 於同会場

「和紙の和紙たる所以、その生かし方」

自然素材の魅力を大学で講義し続ける建築家丸谷博男さん。和紙の魅力を説き、氏の「ただの白い和紙」プロジェクトなどの実践例をスライド付きで講演していただきます。

素の紙展